

森蘊における建築と庭園の結びつきの視点

—— 小堀遠州の伝記を通して ——

Mori Osamu's viewpoint of the relationship of architecture and garden

—— Through the biography of Kobori Enshu ——

田 中 栄 治

Eiji Tanaka

Abstract

In this paper, I considered the biography of Kobori Enshu, written by a Japanese garden researcher and gardener Mori Osamu in 1966 and 1967. As a result, it was found that Mori used the viewpoint of the relationship of architecture and garden as a clue for the study of Japanese gardens. He pursued that viewpoint in the study of Katsura Rikyu in 1950's. In addition, I compared it with the biography of Kobori Enshu written by Shigemori Mirei in 1949. It was found that Mori Osamu's viewpoint was not in the biography of Kobori Enshu written by Shigemori. Furthermore, it was found that the architect Horiguchi Sutemi, who studied Japanese gardens, shared a common viewpoint with Mori Osamu in the description about Kobori Enshu in 1965. In addition, the architect Nishizawa Fumitaka, who measured and studied Japanese gardens under the influence of Mori Osamu, was able to be seen the influence of Mori Osamu's viewpoint in the description about Kobori Enshu in 1976.

キーワード：森蘊，建築，庭園，結びつき，小堀遠州

I. はじめに

日本庭園研究者で作庭家の森蘊は、建築と庭園の結びつきの視点をもって、生涯日本庭園の研究と作庭を行った。これまでに、前々稿^{注1}では森と建築家の堀口捨己・西澤文隆他のそれぞれの桂離宮意匠論を比較することにより、戦時中に書かれた桂離宮の庭園を建築的であるとする藤島亥治郎の桂離宮意匠論を、戦後の堀口や森が建築と庭園の結びつきの視点による桂離宮意匠論に発展させ、さらにそれが西澤に影響を与えていたことがわかった。また、前稿^{注2}では、森と建築家の谷口吉郎のそれぞれの修学院離宮意匠論を比較することにより、彼らが修学院離宮の建築と庭園の造形において作者達の意匠心を明らかにしようとしていたことがわかった。これらのことから、森は古文書や絵図などの徹底した文献調査と、庭園や遺跡の実測・発掘・復元整備を通した精密な現地調査から、復原的研究という手法を用いて日本庭園研究を行ったが、そこでは建築と庭園の結びつきの視点を持って研究を行うことにより、日本庭園および建築の作者の意匠心を追求しようとしていたことがわかった。

本稿では、引き続き森の著した小堀遠州の伝記について考察することにより、森の建築と庭園の結びつきの視点の展開を明らかにすることを目的とする。また、森以前に書かれた遠州の伝記とし

て、重森三玲の著した小堀遠州の伝記との比較を行う。その上で、日本庭園研究を行った建築家・堀口の森への影響と、森からの影響を受けながら日本庭園の実測・研究を行った建築家・西澤への影響についても考察する。

Ⅱ. 建築と庭園の結びつきの視点

小堀遠州の伝記をみる前に、森の建築と庭園の結びつきの視点について改めてまとめておく^{注3}。

森は、東京帝国大学農学部農学科在学中から日本庭園研究には日本建築の知識が必要であると考え、東京帝国大学工学部建築学科の授業を聴講し、東京工業大学建築学科の前田松韻研究室に出入りしていた。1932（昭和7）年に日本建築学会に入会し、さらに1938（昭和13）年には建築史研究会にも入会して、森の初期の研究の多くは、建築系の研究誌に発表されている。その後も、特に東京工業大学建築学科とつながりを持ち続け、前田松韻から研究の指導を受けており、第二次世界大戦後には藤岡通夫や谷口吉郎との交流を通して、建築と庭園の結びつきの視点を深めていったと考えられる^{注4}。

森は、1936（昭和11）年頃からしばしば桂離宮の实地踏査を試み、1941（昭和16）年の日本学術振興会学術奨励金下附により本格的に桂離宮の研究を開始した。1950（昭和25）年度には文部省科学研究費の助成を受けてさらに研究を続け、その成果を1953年（昭和28）年に学位請求論文『桂離宮の研究』として東京工業大学に提出し、農学部出身ながら工学博士の学位を取得している。桂離宮の研究の中で、森は建築と庭園の結びつきの視点を持って作者の意匠心を追求しようとしており、その視点は創元社版『桂離宮』（1951）や学位請求論文を一部編集・加筆した東都文化版『桂離宮』（1955）、『新版 桂離宮』（1956）などの著書における桂離宮意匠論によって発展させられている。

森の桂離宮意匠論にみられる建築と庭園の結びつきの視点を整理すると、主に以下のものであった。

- ①建築と庭園の実用性
- ②庭園における建築的意匠
- ③庭園における間仕切の存在

これらのうち、①「建築と庭園の実用性」については、森は桂離宮の建築と庭園が観月や芸能及びスポーツなどの目的のために高い関連性を持って計画されているとしている。建築と庭園の実用性について、森は創元社版『桂離宮』（1951）のなかで以下のように書いている。

そこには桂離宮の性格があり、形姿の上だけでなく、このような面で建築と庭園との密接なつながりが認められる所、本当の意味の建築と庭園の有機的結合と調和という用語に、ぴったりと当はまるようである¹⁾

ここで森は、建築と庭園の実用性として、桂離宮の建築と庭園が同じ目的のために一体となり、高い関連性を持って有機的に結合し、調和していることを高く評価している（図1）。なお、「建築と庭園の実用性」という言葉は、東都文化版『桂離宮』（1955）から使われており、それ以前の創元社版『桂離宮』（1951）では「建築と庭園の関連的合理性」という言葉が使われていた。

また、②「庭園における建築的意匠」については、桂離宮の興寄の前庭や書院建築周辺、松琴亭や笑意軒の茶亭周辺などに建築的意匠がみられるとし、森はそこから桂離宮の庭園の近代的で合理的な点を明らかにしている。この点について、森は東都文化版『桂離宮』（1955）において以下のように述べている。

桂離宮庭園の中には風景的意匠と建築的意匠が渾然一體となり、然もこの両者はよく統一され、調和して居る事は驚くべきことである。[…中略…] 桂離宮に於てドイツの近代建築家ブルーノ・タウト氏をして三嘆これ久しうせしめたものは、むしろ庭園と呼ばれないような建築物に接近した部分と、それを取りかこむあらゆる空間の近代的處理にあると思われる²⁾

森は、桂離宮の庭園にそれまではみられなかった石造物や方形の刈り込みなどが大胆に取り入れられ、直線的な意匠や明さが実現されており、また建築と庭園の接続部分における建築的意匠については、庭園の自然的意匠と一体となり、統一され、調和していることを高く評価している（図2）。

さらに、③「庭園における間仕切の存在」については、森は「庭園における建築的意匠」を発展させ、『新版 桂離宮』（1956）では、庭園の建築的な形態としての取扱いのみではなく、空間的な構成を取り上げて、庭園の部分を築山や樹木、方形の刈り込みなどで切り取られた「屋外室」とみる考え方を取り入れている。これは、大正期の生活改善運動における庭園改造の議論のなかで出てきた、建築と一体となった屋外の室という考え方を日本庭園研究に当てはめたものであり^{注5}、さらに1954年来日した建築家グロピウスを森が桂離宮に案内した際に、「グロピウス博士が、『桂離宮の庭園は屋外における建築または自然物により切り取られた空間の面白さ』を讃えていた」³⁾ ことに影響を受けたものであると考えられる。この点については、森は『新版 桂離宮』（1956）において以下のように述べている。

建築的意匠をたんに建築形態的の取扱いに限定してしまうことは、狭量であると考えられるのであって、建築的精神という語句の解釋に立脚するならば、[…中略…] それは庭園がたんに自然風景の象徴であるという觀念を一步進めて、その中に自然風景的点



図1 桂離宮 古書院月見台から庭園を望む



図2 桂離宮 興寄前庭



図3 桂離宮 間仕切りの飛び石

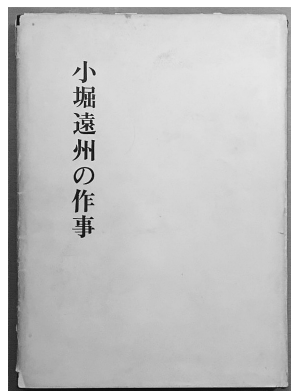


図4 『小堀遠州の作事』
森蘊 1966

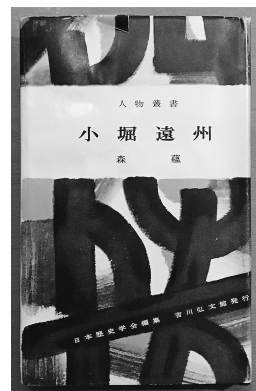


図5 『人物叢書 小堀遠州』
森蘊 1967

景物をもつ屋外室というものも、また庭園の範疇に在り得ることの実證してみようとするのである⁴⁾

森は、「庭園における間仕切の存在」として、築山や樹木、刈り込みなどの物理的に空間を分ける間仕切だけではなく、飛び石の高さの違いによる、眺望を生かしながら人の意識の上で空間を分ける観念的な間仕切の存在も指摘している（図3）。

これらのことから、森の建築と庭園の結びつきの視点としては、建築と庭園の目的のための高い関連性を持った実用性と、庭園における建築的な形態の取り扱い、さらには屋外室とみなせる庭園における建築的な空間の構成を挙げることができる。次節以降、森の著した『小堀遠州の作事』（1966、図4）および『人物叢書 小堀遠州』（1967、図5）の記述を通して、森の建築と庭園の結びつきの視点について、さらに詳しく考察を行う。『小堀遠州の作事』について森は「建築・庭園などの作事奉行として活躍した遠州の、本当の姿に近いものを描き出そうというのが著者多年の念願であり、本書の目的でもある」⁵⁾とし、『人物叢書 小堀遠州』について森は「単に遠州の作事奉行としての活躍振りを明確にするに止まらず、その内面すなわち家庭人として、茶人として、文人としての側からもうかがい見なければ、本当の結論に到達し得ないのではないかと気づくようになった」⁶⁾としている。

Ⅲ. 建築・庭園の総合芸術家・小堀遠州

小堀遠州（1579－1647、図6）は、安土桃山時代から江戸時代初期の大名であり、茶人である。遠州は伏見奉行という行政組織上の公吏を務めながら、1606（慶長11）年から1644（寛永21）年までの40年近くにわたり公儀作事奉行として皇室関係の御殿や将軍用の居館などの建設で多くの成果を挙げた。その成果は建築のみにとどまらず、庭園も含めたものであり、森は「遠州は従来の建築家や庭園家の利用しない角度や曲線や曲面の面白さを、建築や庭園の配置にとりあげ、細部



図6 小堀遠州寿像

意匠に応用することをしはじめたいわば時のアイデアマンであった」⁷⁾としている。遠州については森の研究以前から桂離宮の作者ではないかという議論があり、さらに建築と庭園の両方について優れた業績を残した遠州は、建築と庭園の結びつきを追求し続けていた森にとって大きな関心を持ち続ける対象であった。森は、まず遠州の作成した指図に着目している（図7）。

遠州はもって生まれた科学的な頭脳に加えて、若い頃からの体験を土台とした土木建築の技術的意匠的素養を身につけた人である。それだけに建築については勿論のこと、庭園の場合でも、建築工学的な方法を応用し、実測から得た数値と、或る幾何学的な製図法によって設計図即ち指図を作製している。[…中略…] 建築と同じ敷地の中にある庭園については、共に同じ縮尺に庭園の平面図をかき、その中に配置される樹木や庭石だけは、その高さ大きさの比例に応じて、立ち姿を図示するもので、建築における起し絵図と同じような役目をなす⁸⁾

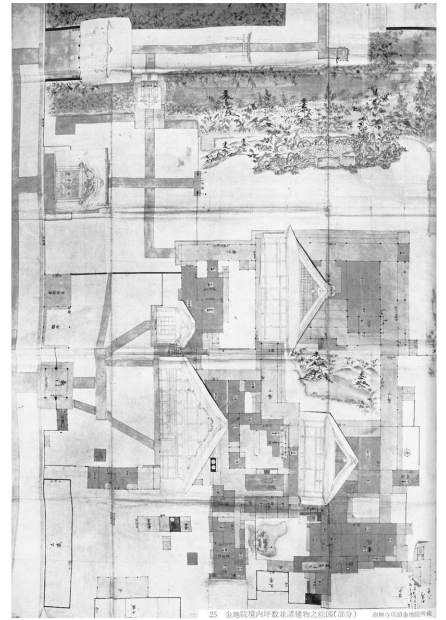


図7 金地院境内坪数並諸建物之絵図（部分）

森は、まず遠州の作成した指図のなかに建築の平面図と庭園が同じ縮尺で描き込まれている点を重要視している。森によると、現在と同じように、当時においても建築や庭園を構築する時に、まずは設計図としての指図を用意して施工していたが、建築の指図がかなり進歩していたのに対して、庭園の方は皇室や將軍家などに説明する時にごく簡単なものを用意する程度であった。遠州の指図には、建築と庭園を総合的にとらえようとする意図が読み取られる。さらに、遠州の指図に樹木や庭石だけは高さ大きさに比例した姿図を描き込んでいることについて、森は建築における起し絵図と同じような役割を持っているとしている。起し絵図は茶室建築を立体的に構想する時に用いる手法であり、將軍の茶道指南役も務めた一流の茶人であり、茶室建築の作事を得意とした遠州が、その茶室の手法を庭園の構想に応用したものであり、森は「自然風景式庭園設計図について考えると、遠州の作った図は、建築との繋りに於て重要な役割を果たしたものである」⁹⁾と指摘している。これは、遠州が指図を作成する時点から、建築と庭園の結びつきを意識していたことを表している。

その上で、実際にできあがった建築と庭園については、「遠州が関与した建築や庭園の作品を通じて言えることは、如何にも纏まりよく、外観は綺麗で、すこぶる技巧的であることがその特色のようである」¹⁰⁾としながら、遠州の建築の計画には庭園が考慮されており、庭園の計画には亭や茶屋、数寄屋などの庭園建築が綿密に計画されていたと指摘している。

建築家としての遠州には、普通の専門家とは違う面、すなわち庭園を重要視する面が強く出ているように思われる¹¹⁾

遠州の建築計画には必ず庭園の取扱いが計算に入れられていたのではないかと述べたがその庭園を享用する拠点としての庭園建築（亭・茶屋・数寄屋）の計画の綿密さは抜群のものがあった¹²⁾

森は遠州について「建築家の中でも殊に庭園のよくできる建築計画家と言おうか、建築・庭園など総合芸術家と言った方が当たっているのかも知れない」¹³⁾ としている。これらのことから、森が建築と庭園の結びつきの視点を持って小堀遠州の評価を行っていることがわかる。

Ⅳ. 森蘊における建築と庭園の結びつきの視点

ここまで、森の建築と庭園の結びつきの視点についてまとめ、森の建築家および作庭家としての小堀遠州への評価について考察してきた。ここからは、森の著書である『小堀遠州の作事』および『人物叢書 小堀遠州』に書かれている具体的な建築と庭園についての記述を通して、森における建築と庭園の結びつきの視点についてさらに考察を進めていく。

1. 建築と庭園の実用性

ここではまず、先に整理した森の建築と庭園の結びつきの視点のうち、①「建築と庭園の実用性」について、実際に遠州が作事として関わったとみられる建築および庭園を例として森の記述をみていくこととする。

1. 1. 庭園を考慮した建築配置

(1) 寛永度内裏

1623（元和9）年に伏見奉行となり、当時の建築庭園界の第一人者となっていた遠州は、寛永度内裏の作事において従前の内裏の型を破った殿舎の配置を採用している（図8）。具体的には、南之御門と紫宸殿が敷地南北軸中軸上からかなり西に偏った配置になっている点について、森は以下のように考察している。

紫宸殿の東側については、そのほぼ東側に小御所が南面して並び、常御所と、御見間の前面が著しくあいているのである。これらの殿舎配置は庭園に十分な敷地を与えるためであったと思われる。即ち小御所ではその南側にややへだたって建った大工部屋と土蔵との間に、華麗な小泉水が設けられていること、常御所南庭は、石組の豊富な平庭的枯山水風を採用している点、御見間の前面には少し空地を置いて花壇が設けられていることなどから言えるであろう¹⁴⁾

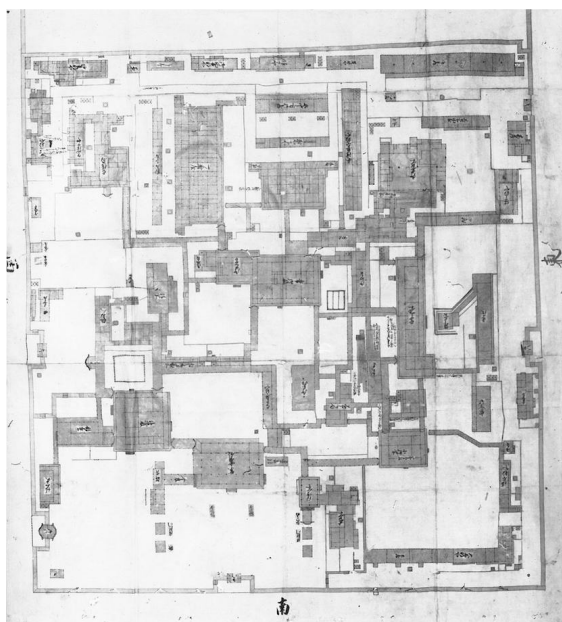


図8 寛永度内裏

ここで森は、遠州が建築と庭園を総合的に構想した結果、それまでの通例の殿舎配置では庭園のための十分な敷地が確保できないと考え、従前の内裏の配置の型を破っても庭園の敷地を確保しようとしていると考察している。森は、遠州が建築と庭園の実用性を重要視している点を高く評価している。

(2) 二条城二の丸

二条城二の丸は、後水尾天皇の行幸のため御殿などを増築することとなり、1625（寛永2）年に遠州の指導のもとに工事が行われた。森は、二条城二の丸において遠州が2つの点について苦心したとしている。そのひとつは行幸御殿と以前からあった殿舎との取り合わせであり、もうひとつが行幸御殿と庭園との関係である。行幸御殿が池の南に建てられたことにより、それまでの庭園の眺めから見ると行幸御殿や池岸の御亭などからの眺めが裏側になってしまうことへの遠州の対応に関して、森は以下のように記している。

そこで池汀や中島の地割にはほとんど手をつけずに、行幸御殿方向からの眺めを最高のものとすべく、南岸に近い部分の主要な石組を南向きに、置き換えたのである。勿論その作意が、作事奉行の遠州から出たことは疑うべくもない¹⁵⁾

森は、二条城二の丸において遠州が行幸御殿の増築をした際に、その建築からの眺めを考慮して庭園を改造していたことに着目している。ここに、森は遠州の作事奉行としての苦心をみており、森の建築と庭園の結びつきの視点がみられる（図9）。

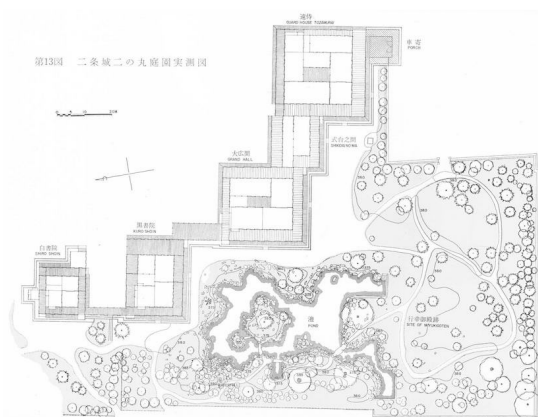


図9 二条城二の丸

1. 2. 建築と庭園の接続部分

(1) 孤篷庵忘筌

孤篷庵は、大徳寺塔頭のひとつとして、最初は1612（慶長17）年に龍光院内に建立され、その後1643（寛永20）年に現在の場所に移転建設された。孤篷庵は遠州の隠居所であり、小堀家の菩提寺である。孤篷庵の建物自体は、1793（寛政5）年に火災にかかったが、遠州の流を慕う松平不昧公の助力により、創建時の指図にしたがって再建されている。森は、忘筌の座敷の特筆される点として、以下のものを挙げている。

もう一つこの座敷で特筆される点は、西向きの板縁の入側が二段となっており、その外の側柱間に中敷居を入れ、上方に四枚の明障子を入れ、下が吹はなしとなっている手法である。この形式は不愉快な夏期の西日を遮るための実用と、一方には室内から

は真白な明障子の明るさの下に閑雅な陰影に富む露地を眺める趣向であり、これを腰高障子の腰板に描かれた一幅の画面と見るもよし、孤篷の名にちなむ舟、忘筌の名に繋がる漁網を思わせる舟端の象徴とも受けとれよう¹⁶⁾

ここで森は、孤篷庵忘筌の他には類をみない建築と庭園の接続部分の取り扱いを、建築と庭園の実用性の視点から考察している（図10）。

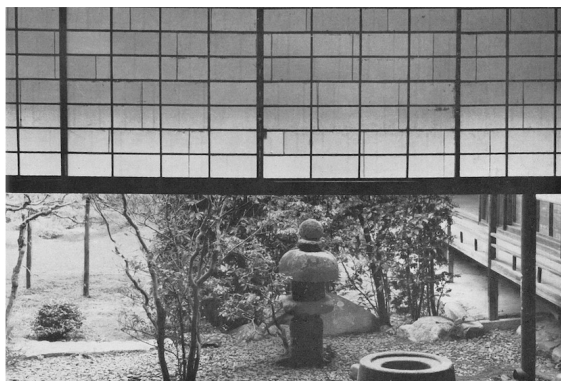


図10 孤篷庵忘筌

（2）その他の公儀作事

森は、遠州が公儀作事奉行としてかかわった建築と庭園について、「中井大和守正純によって常識的に引かれた指図が、惣奉行の遠州によって独特の配置図に修正され、庭園及び庭園建築を加味することによって、一層潤いのある指図に作り直される可能性があったと見てよいであろう」¹⁷⁾としている。江戸幕府の京都大工頭を勤める中井家が指図を描いた場合であっても、遠州が指図を検討し、庭園の構成を考慮して建築の配置を決めているとしている。

公儀の寝殿造系建築の場合には、専任の中井家が作製する指図を慎重に検討し、殿舎の配置を決定するに当っては、庭園の部分に敷地を十分に与えるようにし、庭園建築に数寄屋的要素を加味し、庭園それ自身に新機軸を取り入れるなど、思い切った創意が朝野の好評を勝ち得たのであろう¹⁸⁾

遠州はもともと建築家の系統であったし、庭園部門を含めた惣奉行という資格にも助けられたのであろうか、彼の計画した宮殿の敷地のとりかたや、建造物の配列を決定する際にも、庭園計画がすでに計算に入れてあったということが特筆されてよいと思う¹⁹⁾

ここでも、森は遠州が建築の配置を決める際に、それに関連付けてすでに庭園計画が考慮されている点を重要視している。そこには森のいう建築と庭園の実用性、つまり建築と庭園の結びつきの視点からみて遠州を高く評価していることがわかる。

2. 庭園における建築的意匠

次に、森の建築と庭園の結びつきの視点のうち、②「庭園における建築的意匠」についてみていく。森は遠州について「庭園建築（池亭、茶屋、数寄屋など）だけでなく、庭園そのものの中でも建築的手法が充分に取入れられるべきを主張しつつづけている。普通ならば自然風に取扱われるべき池辺や通路を、全部切石を以て組み立てたり、自然の石組をつなぐのにも部分的に切石を挿入したりした」²⁰⁾としている。また、「日本古来の庭園はすべて自然風景式であると信じられて来た。ところが遠州は庭園そのものの中でも建築的手法を取り込んで、やがて本邦最初の整形式庭園をさえ

設計した人である」²¹⁾とし、遠州が日本庭園に建築的手法を取り込んだことにより、はじめて西欧風ともいえる整形式庭園をつくり出したとしている。森は、整形式庭園について石材によるものと、植栽によるものを挙げている。

2. 1. 石材による整形式庭園

(1) 寛永度仙洞御所

現在の仙洞御所は、その後の改変により寛永度の指図とは異なった姿となっているが、森によると池の東岸に切り石の護岸があり、中島の南半分池辺に自然風の石組みの間に切石が使用されているなど、他の庭園ではみられない手法が採用されていたとしている。さらに森によると、現在の仙洞御所の北池庭は、寛永年間の元女院御所の池庭であり、この池庭について、森は「南岸あたりの建築に接近した部分は鍵の手に畳まれた建築的取扱いのもの」²²⁾であるとしている。寛永度の仙洞御所の庭園について、森は以下のように記している。

仙洞御所の著名な池庭については、[…中略…]書院（御座間）の東前面に東西約四二m、南北長さ約九四mの切石を積んで護岸用とした矩形の池があり、池中に築山のあ
る自然風の中島を置いた。方池の東岸に添って御茶屋が建っていた²³⁾

それまでの日本庭園が曲線や曲面などの自然な形を基本としていたのに対して、寛永度に遠州が作事を担当した仙洞御所の切石の護岸による矩形の池を、森はそれまでにない整形式庭園として、これを庭園における建築的意匠の視点から考察している（図11）。

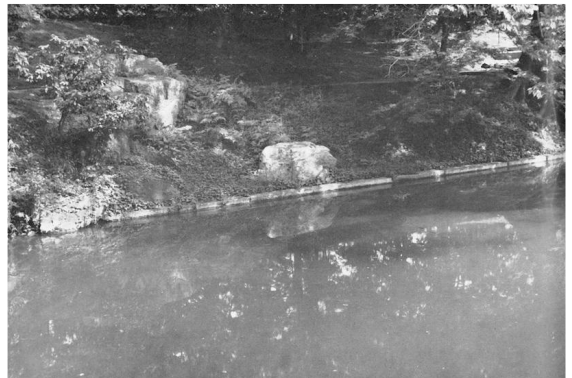


図11 仙洞御所

(2) 孤篷庵敷石道

孤篷庵については、先に忘筌の建築と庭園の接続部分に森の建築と庭園の実用性の視点をみたが、それとともに孤篷庵の敷地入口の門から建築までの敷石道について、森は以下のように記している。

これらの加工石材はすべて長石と自然石とを有機的に接合する役目を果たすだけでなく、とかく単調になり勝ちの長距離の敷石道の景観に変化を与える役目を充分に果たしていると言える²⁴⁾

森は、自然石と有機的に接合するように配置された直線的な加工石材を、庭園における建築

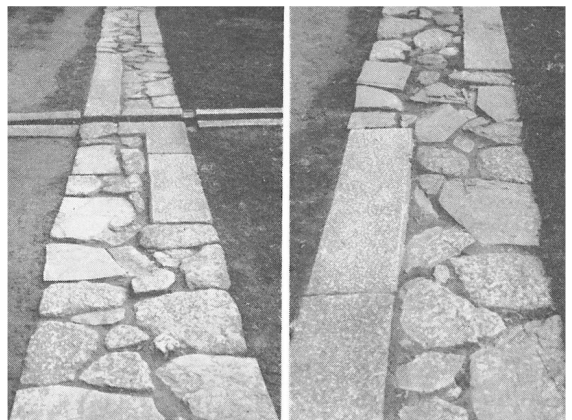


図12 孤篷庵敷石道

的意匠の視点から考察している（図12）。これらの庭園における建築的意匠には、森の建築と庭園の結びつきの視点をみることができる。

2. 2. 植栽による整形式庭園

(1) 寛永度内裏

森は、「庭園における建築的な構成は、加工石材によるものだけではない」²⁵⁾として、特に刈り込みや花壇などの植栽による整形式庭園について取り上げている。森は、江戸城内の露地における植栽について言及した上で、寛永度内裏の花壇について以下のように記している。

江戸城内の露地で、植込を切り抜いて風景を眺めさせるような突飛なくふうを試みたのも遠州であった。さらに驚くべきは、従来の日本式庭園の中で全然採用されなかった整形式花壇を大量に且広面積に採用しはじめたことである。その最初は寛永度内裏で、[…中略…] 何れも東西行に配列されている²⁶⁾

それまでの森の桂離宮研究では、方形に刈り込まれた植込みを庭園における建築的意匠とし、さらにそれを「庭園における間仕切りの存在」という視点に発展させていた。ここでは、森は遠州が整形式花壇を広い面積にわたって大量に採用し、植栽による整形式庭園を構想していたことに驚いており、それを庭園における建築的意匠として考察している。

(2) 新院（明正院）御所

さらに、新院（明正院）御所では整形式花壇だけではなく、矩形の輪郭を持つ芝生についても、森は整形式庭園として庭園における建築的意匠の視点から考察を行なっている。新院（明正院）御所について、森は以下のように記している。

庭園は敷地の東南部常御殿の南、御文庫の西前面にあるが、日本式庭園在来の築山泉水式を採用することなく、矩形の輪郭をもつ芝生、溝渠それに花壇ばかりででき上がっている²⁷⁾

新院御所ではもう一つ奇抜な意匠を敢行した。最初寛永度内裏で試作した小規模な花壇を大量に採用したことである²⁸⁾

森はこれら遠州による西洋風整形式庭園が、どのような発想から生み出されたのか、西洋庭園の影響があったのかどうかは不明であるが、その可能性はあるとしている。ここで森は、方形の刈り込み、整形式花壇、矩形の芝生など、それまでの日本庭園にはなかった直線的な造形が、庭園における建築的意匠とみなすことがで

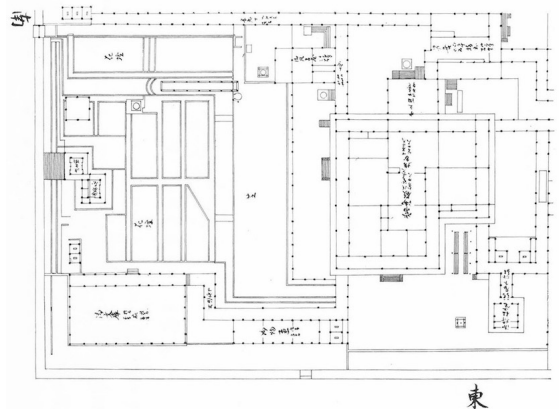


図13 新院御所御茶屋花壇付近指図（写）

きるとし、そこには森の建築と庭園の結びつきの視点をみることができる（図13）。

V. 重森三玲の小堀遠州伝記との比較

ここまで、森の著した小堀遠州の伝記を考察することにより、森が遠州を建築と庭園の結びつきの視点から考察し、評価していることがわかった。ここでは、森以前に書かれた遠州の伝記として、作庭家であり日本庭園研究者でもある重森三玲の著した『茶人傳叢書（2）小堀遠州』（1949）について、森の著書との比較を行うことにより、森の建築と庭園の結びつきの視点の独自性について考察を行う（図14）。なお、重森は、『茶人傳叢書（2）小堀遠州』を書くにあたって、「茶道や庭園に天才をもつ遠州に就ては、早くから尊敬もし、興味をもつてゐたのであつた。／そのみでなく、遠州と云ふ人は、すべての藝術に對する大きな理解者であり、且つ又、創作力に於ても天才的な人だけに、技術的にも自信があつたし、その點遠州と云ふ人は、早くから私の好きな人物の一人であつた」²⁹⁾として高く評価している。

まず、重森は遠州が建築とともに庭園においても多くの業績を残したことを評価している。

遠江守小堀政一は、前述のごとく、建築奉行として、多くの建築に関係したが、又同時に造庭奉行として、乃至は自らの趣味の上から多くの庭園を作つたのであつた。それは言ふまでもなく、茶人としての天才遠州が、茶庭に於て傑出した關係で、一般書院庭園にも進んで行つたことが當然であつたと考へられる³⁰⁾

ただし、重森が遠州の建築と庭園を考察し評価する時には、森のように建築と庭園の結びつきの視点はあまりみられない。たとえば、森が建築と庭園の結びつきの視点から、庭園における建築的意匠を持っていると評価している仙洞御所庭園についても、重森は以下のように記している。

遠州の奉行してゐた仙洞御庭園は、實に廣大無邊と記されてゐる如き大園池であつて、[…中略…]奇石佳木に對して、一覽する人々は驚きの目をみはつたほどであつた。[…中略…] この御庭園は、眞行草と言つた三部の池庭からなり、南部の大池庭が最も美しい。この南部池庭には仙洞八景が數へられ、特に西部の小石の濱は、小田原一升石と言はれる有名なもので、廣大な濱の景觀で、明朗豪快な景觀が見られる³¹⁾

ここで、重森は仙洞御所庭園の奇石佳木や小石の浜などについては高く評価しながら、森のように遠州の庭園における建築的意匠についての踏み込んだ考察までは行っていない。

また、森が建築と庭園の結びつきの視点から、建築と庭園の実用性としてその関連性を高く評価している孤篷庵忘筌の建築と庭園の接続部分の取り扱いについても、建築の視点と庭園の視点を別々に評価している。まず建築については、重森は以下のように記している。

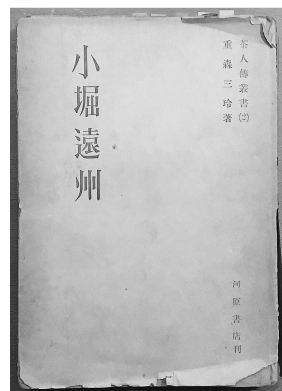


図14 「茶人傳叢書（2）小堀遠州」
重森三玲 1949

特に興味のあるのは、西向縁の入側が二段となり、その向ふに敷居を入れて、上に四枚の障子を入れ、下は吹はなしとされている。この形式は西側の夕日を遮ぎる爲の實用と、孤篷の舟と、忘筌の網に因む舟入の形式とを兼ねた、彼の創作であるが、兎も角何人もが一應驚目すべき珍しい構造である³²⁾

ここでは、建築としての実用性と形式については評価しているが、庭園との関連性については言及していない。一方、孤篷庵の庭園については、重森は以下のように記している。

遠州の意圖する處の近江八景を寓意化した景觀がとられ、これ又、忘筌に因む作庭意匠が見られる。さうして、書院式の茶室としての忘筌に對しての、書院式露地を兼用した彼の意圖は、その飛石や、手水鉢や、石燈籠の上にもよく表現されて居り、遠州が茶の方に於て、「キツパリ」と言ふことを主張した點が、建築や庭園の上にも表現され、何處となく明朗な意圖が見られ、あくまでも自然に立脚しつつ、而も作意を強調した點が窺はれて興味がある³³⁾

ここでは、庭園についての遠州の作庭意図についての評価になっており、書院式茶室を意識したと指摘しながら、具体的な建築と庭園の実用性としての関連性については言及されていない。

これらからわかるように、重森の遠州の評価は、建築と庭園に関して、あるいは建築奉行としての遠州と造庭奉行としての遠州を、その関連性から評価しようとする視点ではない。そもそも、『茶人傳叢書（2） 小堀遠州』の構成が、「第二章 造宮奉行としての遠州の業績」のなかに、「第一節 建築奉行としての遠州」と「第二節 造庭奉行としての遠州」となっており、建築と庭園、建築奉行としての遠州と造庭奉行としての遠州を分けて考えるようになっている。このことから、森の小堀遠州伝記における建築と庭園の結びつきの視点は、それ以前の重森の小堀遠州伝記にはみられなかった視点であるということがわかる。

VI. 堀口捨己の影響

森は『日本庭園史話』（1981）のなかで「日本庭園史学をはじめた人たち」のひとりとして森より10歳年上の建築家・堀口捨己を挙げて、その創作者としての視点を持った日本庭園研究を高く評価している^{注6}。また、森は『小堀遠州の作事』を書くにあたって、「堀口捨己博士の高著『利休の茶室』や遠州関係の『茶室おこし絵図集』も大へん参考になったので、これらの点はただ感謝の一語につきる」³⁴⁾としている。森が『小堀遠州の作事』を出版した前年の1965（昭和40）年に、堀口は『庭と空間構成の伝統』を発行している（図15）。堀口は『庭と空間構成の伝統』について、「この本は日本庭の観照の書であり、その観照を深めるための探求の書でもある。[…中略…] 庭をここでは、空間構成の芸術の一つと見立てて、それを広く把え、わが国に育ったその伝統を先ず顧みた。そのとき今まで庭とは呼ばなかったものも自らに加わって来て、極めてわが国らしさの豊かな域を見出した」³⁵⁾としている。



図15 『庭と空間構成の伝統』
堀口捨己 1965

堀口は『庭と空間構成の伝統』のなかで、二条城の庭について以下のように記している。

寛永三年に、ここへ後水尾天皇行幸があった時、新しく行幸御殿が今の書院の南西の方に建てられ、前からの庭に手が加えられたように思える。その時の作事奉行の一人が小堀遠州であった〔…中略…〕行幸御殿の眺めをよくするための庭園の変更が、おそらくその時に行われたのであろう³⁶⁾

ここでは、森の書いた小堀遠州の伝記と同じように、建築と庭の実用性という建築と庭園の結びつきの視点をみることができる。

また、仙洞御所の庭については以下のように記している。

京都の仙洞御所の庭は、小堀遠州が作った庭として世に知られている。しかし長い年月のうちに幾度も焼け、幾度も作り変えられている。〔…中略…〕ここに写真を出している所は、仙洞の御殿前、南の池のところであるが、ここはかなり変わり様をしていたが、遠州時代のものが幾らか残っていると思えるところである〔…中略…〕遠州時代は「御書院」や「二階文庫」などの建物に添って池が切石で岸が作られてあった³⁷⁾

堀口は、切石による整形形式庭園に着目して、庭園における建築的意匠という建築と庭園の結びつきの視点から仙洞御所庭園の考察を行なっている（図16）。

森は、堀口の『庭と空間構成の伝統』について、「この本は文献的な面でもみごとであるが庭園を美しく作るという抜群の鋭い意識が作用しているので、その資料の扱い方にどこから見ても素晴らしいものが感ぜられる」³⁸⁾とし、堀口の創作者としての視点を高く評価している。堀口の『庭と空間構成の伝統』と森の『小堀遠州の作事』は発行時期が近いので、直接の影響は少ないと思われるが、堀口と森に建築と庭園の結びつきという共通した視点が見られ、堀口の日本庭園研究が森の研究に影響していると考えられる。



図16 京都仙洞御所南の池の舟付の飛石

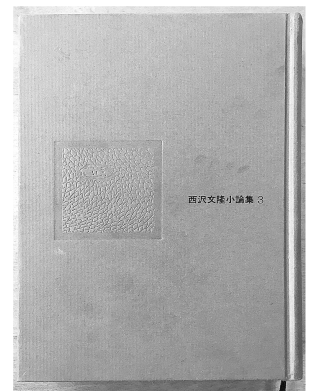


図17 『西澤文隆小論集3 庭園論II』
西澤文隆 1976

Ⅶ. 西澤文隆への影響

森より10歳年下の西澤文隆は、日本庭園の実測・研究を行った建築家であり、庭園研究において森の影響を受けた^{注7}。西澤は庭園、特に建築と庭園の関係に興味を持つなかで、1953（昭和28）年頃から森と親交を持つようになる。さらに、森の『小堀遠州の作事』が発行された1966（昭和41）年に、西澤が「建築と庭園の関わり」についての本の出版を依頼されたことをきっかけとして日本庭園の実測を開始し

ており、西澤は森から実測図の提供を受け、あるいは森の著作から拡大トレースを行って実測のためのベース図面としている。

西澤は、『西澤文隆小論集3 庭園論Ⅱ』（1976）において、二条城の庭園について以下のように記している（図17）。

將軍秀忠上洛の際寛永元年九月（一六二四）後水尾天皇行幸を仰ぐことになり、黒書院に対して池庭を挟んで池の南岸に御幸御殿が建てられ、大広間とは南北に細長い棟で繋ぎ、御幸御殿から北池中へ釣殿が架け出されていた。地割はそのままにして庭石はしたがって御幸御殿からの眺めを主にして建てられたのである〔…中略…〕水尾天皇行幸に際しての御造営には小堀遠州が作事奉行をしている³⁹⁾

ここでは、森の日本庭園研究の影響を受けて、西澤にも建築と庭園の実用性という建築と庭園の結びつきの視点をみることができる。

また、西澤は後水尾天皇が譲位後に女院御所および仙洞御所に移った時の作事奉行は小堀遠州であったことを示したのちに、女院御所・仙洞御所について以下のように記している。

宮内庁書陵部蔵の『寛永度仙洞女院御所指図』によるといままでの日本庭園からは想像も及ばない直線の発想があり、大変興味深いのでここに紹介しておく。小堀遠州のこうした直線的発想はどうして生まれたのかはわからないが西欧的な発想である。〔…中略…〕寛永度の指図によると東、南、西の三方を曲折する石垣で囲み、北岸は石垣ではないらしいが直線である⁴⁰⁾

西澤は、女院御所および仙洞御所の直線的な池岸、さらに京都御所の寛永年度御造営の際の長方形ないし短冊形の花壇や矩形の芝生などの例を挙げて、「この遠州の幾何学的デザインがどのようにして生まれ出たのか、森氏ならずとも確かに興味のあるところである」⁴¹⁾としており、ここにも西澤の日本庭園研究に対する、森の庭園における建築的意匠という建築と庭園の結びつきの視点の影響をみることができる。

さらに、西澤は孤篷庵について遠州が先祖の菩提のために建てた大徳寺山内最西端に位置する塔頭であることを示した上で、その庭園について以下のように記している。

ここは建築も見るべき点が多いがもっとも素晴らしいのはアプローチであろう。〔…中略…〕舗石道は突き当りの供待の手前で右に折れるが、この舗石（大ぶりの霰崩しと称すべきか）の模様は技巧の極地に達している。適宜模様に入れられた大ぶりの石が方向指示の役目を果たし、人を巧みに誘導する⁴²⁾

濡椽の向う土椽の上に敷居が宙を飛んでおり、その上は明障子の四枚引違いで、その下はゆけゆけになっていて外気は下をくぐって濡椽いっぱいまで入り込んでくる。土椽に続く南への犬走りの叩きに飛石が打たれており、その向うは玉砂利の庭、土椽には「結露」の手水鉢が置かれ、砂利の向うは刈込みのようでもあり、群生のようでも

ある低い木立になっていて、この小さい茶庭を囲い込んでおり、囲いの向うに広びろと近江八景の庭が拡がる。上述の中連障子のあり方は舟入を想定して創られたといわれるようにスカスカと透けた空間が快よい⁴³⁾

ここでも、西澤の日本庭園研究に対する、森の庭園における建築的意匠と、建築と庭園の実用性という建築と庭園の結びつきの視点の影響をみることができる。さらに西澤は、建築と庭園の結びつきの視点を建築家としての立場から発展させて、「透けた空間」という西澤独自の視点でみている。「透けた空間」は、西澤が日本庭園の実測と研究を通してたどり着いた視点であり、西澤はこれを手がかりとして建築・住宅の設計を行った。

Ⅷ. おわりに

本稿では、安土桃山時代から江戸時代初期の大名であり、茶人であり、さらに作事奉行として多くの優れた建築と庭園の実績を残した小堀遠州について、森蘊の著した小堀遠州伝記の記述を考察することにより、森の建築と庭園の結びつきの視点についてのより詳しい考察を行った。森による小堀遠州伝記では、森の建築と庭園の結びつきの視点のうち、「建築と庭園の実用性」と「庭園における建築的意匠」についての記述がみられた。このことから、森は桂離宮研究のなかで追求した建築と庭園の結びつきの視点を、その後の日本庭園研究の手がかりとしていたことがわかった。

ただし、森による小堀遠州伝記には、森の建築と庭園の結びつきの視点のうちの「庭園における間仕切りの存在」についての記述はみられなかった。これは、森の研究によると桂離宮が庭園を間仕切りで区切っていく、それまでにはみられない手法を徹底させたはじめての庭園であるとしており、桂離宮以前の庭園には「庭園における間仕切りの存在」は明確には現れていないことによると考えられる。

また、森以前に書かれた重森三玲による小堀遠州伝記の記述については、建築の視点と庭園の視点を別々に評価しており、森の小堀遠州伝記における建築と庭園の結びつきの視点は、それ以前の重森の小堀遠州伝記にはみられなかった視点であるということがわかった。

さらに、森と日本庭園研究の上での交流があり、互いに影響しあっていた建築家である堀口捨己とは、小堀遠州に関する記述に建築と庭園の結びつきという共通した視点が見られ、堀口の日本庭園研究が森の研究に影響していることがわかった。また、森と日本庭園研究の上での交流があり、森から影響を受けていた建築家である西澤文隆には、小堀遠州に関する記述に森の建築と庭園の結びつきの視点の影響をみることができた。

【注】

- 注1 田中栄治「建築と庭園の結びつきの視点 ―森蘊と堀口捨己・西澤文隆の桂離宮意匠論―」『神戸山手大学紀要』第19号、69-104頁、2017
- 注2 田中栄治「建築と庭園における意匠心 ―森蘊と谷口吉郎の修学院離宮意匠論―」『神戸山手大学紀要』第20号、47-73頁、2018
- 注3 田中栄治「住宅における建築と庭園 ―庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 堀口捨己・西澤文隆―」『神戸山手大学紀要』第17号、9-40頁、2015、において詳しく考察している。
- 注4 田中栄治「庭園研究者・造園家 森蘊と建築家 谷口吉郎 ―昭和前半期における建築家と造

園家の交流―』『神戸山手大学紀要』第18号, 59-87頁, 2016, において詳しく考察している。

注5 田中栄治「大正後期から昭和初期の関西の住宅における庭園の役割 ―阪神間モダニズム住宅 その5―」『神戸山手大学紀要』第14号, 33-55頁, 2012, において詳しく考察している。

注6 田中, 前掲書, 2015および2017において詳しく考察している。

注7 田中, 前掲書, 2015および2017において詳しく考察している。

【図版出典】

- 図1 森蘊『桂離宮』創元社, 図版第18図, 1951
- 図2 森蘊『桂離宮』東都文化社, 図版第3図, 1955
- 図3 森蘊『新版 桂離宮』創元社, 299頁, 1956
- 図4 筆者撮影
- 図5 筆者撮影
- 図6 森蘊『小堀遠州の作事』奈良国立文化財研究所学報第18冊, 図版第1図部分, 1966
- 図7 森蘊, 同上, 図版第25図, 1966
- 図8 森蘊, 同上, 図版第3図, 1966
- 図9 森蘊, 同上, 35頁, 1966
- 図10 森蘊, 同上, 図版第49図, 1966
- 図11 森蘊, 同上, 図版第23図, 1966
- 図12 森蘊, 同上, 154頁, 1966
- 図13 森蘊, 同上, 29頁, 1966
- 図14 筆者撮影
- 図15 筆者撮影
- 図16 堀口捨己『庭と空間構成の伝統』鹿島研究所出版会, 第一四一図, 1965
- 図17 筆者撮影

【引用文献】

- 1) 森蘊『桂離宮』創元社, 178頁, 1951
- 2) 森蘊『桂離宮』東都文化出版, 161-162頁, 1955
- 3) 森蘊『新版 桂離宮』創元社, 297頁, 1956
- 4) 森蘊, 同上, 287-288頁, 1956年
- 5) 森蘊『小堀遠州の作事』奈良国立文化財研究所学報第18冊, 1頁, 1966
- 6) 森蘊『人物叢書 小堀遠州』吉川弘文館, 1-2頁, 1967
- 7) 森蘊, 前掲書, 151頁, 1966
- 8) 森蘊, 前掲書, 156頁, 1966
- 9) 森蘊, 前掲書, 156頁, 1966
- 10) 森蘊, 前掲書, 193頁, 1967
- 11) 森蘊, 前掲書, 191頁, 1967
- 12) 森蘊, 前掲書, 192頁, 1967
- 13) 森蘊, 前掲書, 188頁, 1967

- 14) 森蘊, 前掲書, 26頁, 1966
- 15) 森蘊, 前掲書, 36頁, 1966
- 16) 森蘊, 前掲書, 123-124頁, 1966
- 17) 森蘊, 前掲書, 57頁, 1966
- 18) 森蘊, 前掲書, 128頁, 1966
- 19) 森蘊, 前掲書, 193頁, 1967
- 20) 森蘊, 前掲書, 144頁, 1966
- 21) 森蘊, 前掲書, 193-194頁, 1967
- 22) 森蘊, 前掲書, 160頁, 1967
- 23) 森蘊, 前掲書, 28頁, 1966
- 24) 森蘊, 前掲書, 153-154頁, 1966
- 25) 森蘊, 前掲書, 144頁, 1966
- 26) 森蘊, 前掲書, 144-145頁, 1966
- 27) 森蘊, 前掲書, 30頁, 1966
- 28) 森蘊, 前掲書, 195頁, 1967
- 29) 重森三玲『茶人傳叢書(2) 小堀遠州』河原書店, 序, 1949
- 30) 重森三玲, 同上, 73頁, 1949
- 31) 重森三玲, 同上, 85-86頁, 1949
- 32) 重森三玲, 同上, 62頁, 1949
- 33) 重森三玲, 同上, 62頁, 1949
- 34) 森蘊, 前掲書, 2頁, 1966
- 35) 堀口捨己『庭と空間構成の伝統』鹿島研究所出版会, 1頁, 1965
- 36) 堀口捨己, 同上, 206頁, 1965
- 37) 堀口捨己, 同上, 228-229頁, 1965
- 38) 森蘊『日本庭園史話』NHK ブックスカラー版 日本放送出版協会, 8頁, 1981
- 39) 西澤文隆『西澤文隆小論集3 庭園論Ⅱ』相模書房, 320-321頁, 1976
- 40) 西澤文隆, 同上, 371-372頁, 1976
- 41) 西澤文隆, 同上, 376頁, 1976
- 42) 西澤文隆, 同上, 245-249頁, 1976
- 43) 西澤文隆, 同上, 251頁, 1976

【参考文献】

- ・エマニュエル・マレス「重森三玲と森蘊の庭園観 ―小堀遠州の伝記を通して―」『日本庭園学会誌』第28号, 11-21頁, 2014
- ・森蘊『桂離宮の研究』東京工業大学学位請求論文(博士論文), 1953, 昭和28年12月26日工学博士授与
- ・森蘊「建築と庭園の結びつきを求めて」『建築雑誌』vol.98 No.1211 1983(昭和58)年9月号, 20頁, 1983
- ・森蘊門下生一同『故森蘊先生著述作品目録(稿)』自家版, 1989

